

久保寺逸彦文庫について

アイヌ語・アイヌ文学研究に大きな功績を遺した故・久保寺逸彦氏のご遺族から、氏の旧蔵資料について当センターに寄贈のお申し出がありました。今後のアイヌ文化研究に活かすべく、当センターでは謹んでこれをお受けし、「久保寺逸彦文庫」と名付け、整理・保存作業にあたることにいたしました。

去る7月28日には久保寺氏の二女・久保寺芙美子氏と三女・福井礼子氏が来道され、堀知事に目録を贈呈されました。

久保寺逸彦文庫は、質・量ともに、さきに寄贈をうけた山田秀三文庫にも匹敵するもので、当センターとしても、大切な資料を預かる責任の重さを改めて感じているところです。

現在、図書資料、映像資料などについては既に整理作業に着手しており、来年度中にはまず図書資料の目録を刊行する予定です。



久保寺逸彦資料贈呈式にて
左から福井礼子氏・久保寺芙美子氏・堀知事

《久保寺逸彦氏の略歴》

明治35年9月10日 北海道網走生まれ

旧制釧路中学校、山梨県甲府中学校をへて
大正14年4月国学院大学卒業、東京府立第七中学校教員

昭和19年 東京第二師範学校教員

昭和24年 東京学芸大学教授

昭和35年 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』により文学博士

昭和41年 東京学芸大学退官、駒沢大学教授

昭和46年11月5日 東京武蔵野日赤病院にて死去

《久保寺逸彦氏の業績》

国学院大学在学時代に金田一京助氏に師事してアイヌ語研究を始められ、アイヌ文化研究に大きな功績を遺されました。研究の内容は、大きくは神謡などの口頭文芸の研究と、宗教儀礼などの民族誌の研究とが柱になっています。早くから音声テープや映像フィルムを用いてアイヌ語や伝統儀式の記録をとられていたこと、理論化を急がず50年近い歳月をもっぱら資料の採録と整理に費やされた地道な学風が特徴です。

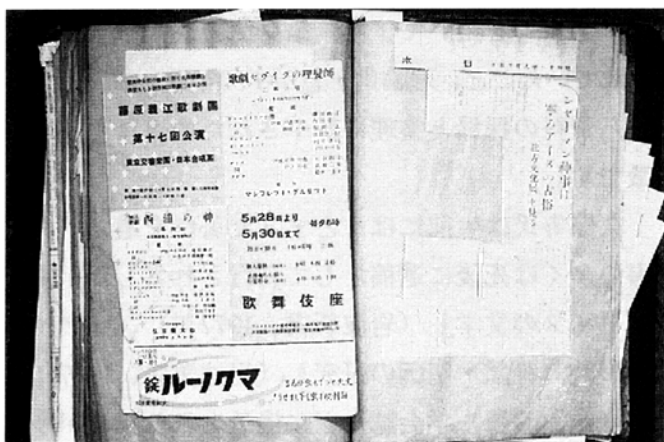
久保寺氏は生前にはまとまった著作を遺さず、著書の多くは死後に遺稿として刊行されました。主著『アイヌの文学』（岩波新書、1977年）、『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』（岩波書店、1977年）のほか、著書や学会誌などに掲載された論文が多数あります。また、未公刊のノート類も多数あり、その一部は北海道教育委員会より『久保寺逸彦ノート』『久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿』として刊行されています。

《寄贈資料の内容》

図書資料	約 2,500 点
文書資料（ノート、原稿など）	約 230 点
音声・映像・写真資料（録音テープ、 映像フィルム、写真など）	約 1,300 点
有形資料（民具など）	約 50 点



図書資料の一部



文書資料の一部（スクラップブック）

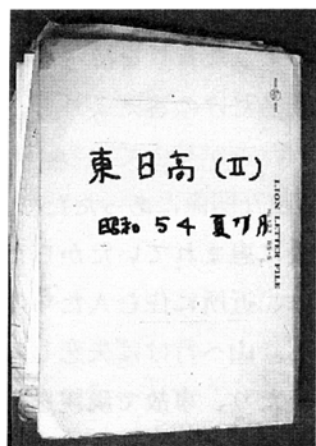
山田秀三文庫の整理作業 その4

山田秀三文庫の整理作業は、昨年度までに図書資料、音声・映像資料のそれぞれについて目録を刊行し、残るは文書資料として仮分類した資料群になりました。

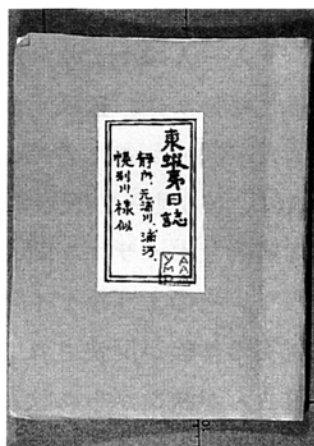
「残るは」と書きましたが、分量はダンボール箱で約50箱と膨大で、中身も様々です。大きくは、地図、各種の文書、ノート類、およびそれらが組合わさったファイル類というふうに分類できるのではないかと考えています。

地図資料には、戦前の陸地測量部や比較的近年の国土地理院の地形図から各種の市販の地図、そして山田氏自筆の地図まで様々なものがあり、ほとんどは氏が地名調査に使用したものです。びっしりと書き込みをしたものも多く、同じ地図で書き込みのあるものが複数ある場合もあって、幾たびも調査と考察を積み上げた氏の学風を感じさせます。文書資料には、アイヌ無形文化伝承保存会、北海道文化財保護協会、北海道曹達株式会社など山田氏が関わった団体や会社に関係する、会議の案内、事業計画などの書類が多く含まれています。ノート類の多くは地名調査の際のフィールドノートです。

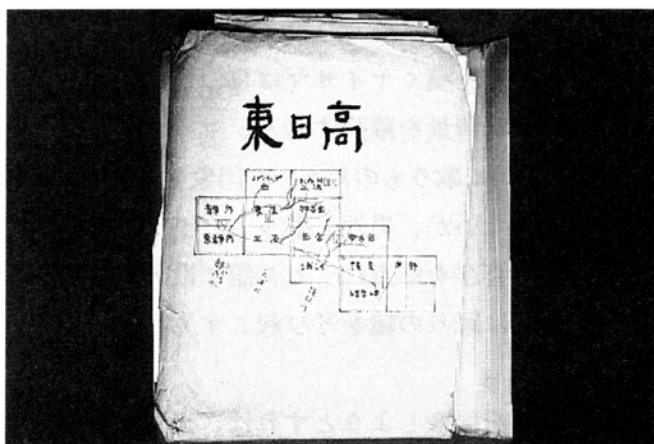
中でも、山田秀三文庫の特徴をよく示しているのは数多くのファイル類でしょう。例えば〔写真1〕のB5判ファイルは、表紙に「東日高（Ⅱ） 昭和54年夏7月」と記載があり、このときの地名調査の関係資料を収めたファイルらしいことがうかがえます。中には、静内町からえりも町にかけての2万5千分の1地形図を折り畳んで収めた封筒〔写真2〕、松浦武四郎『蝦夷日誌（上） 東蝦夷日誌』（時事出版社版、1962年、山田秀三文庫図書資料連番3597）から日高東部に関する部分をコピーし私製の表紙を付けホチキス綴じした冊子〔写真3〕、ネガフィルムと写真とを入れて「東日高 54.7.20-22」と記した封筒を収め、そしてびっしりと調査記録を記し



〔写真1〕



〔写真3〕



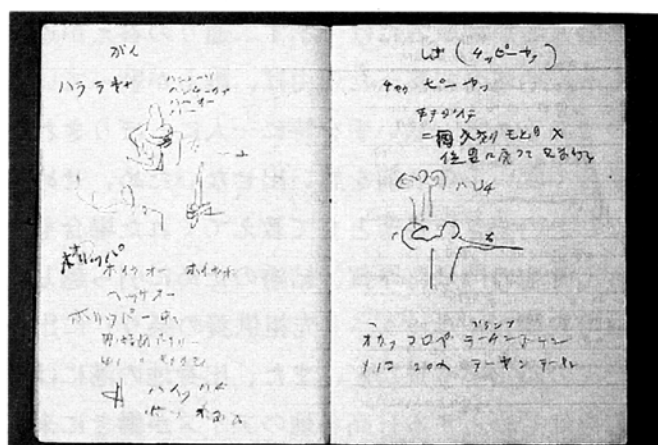
〔写真2〕

沢山の地図や写真を貼り付けた原稿用紙数十枚を綴じ込んでいます。氏の調査の濃密さを思い知らされるファイルです。氏は調査ごとにこうしたファイルを作成していたようで、現時点で約100冊ほどを確認できます。

これだけ多様な資料なので、単純な分類や既存の定型資料の整理方法をそのまま適用することは困難です。資料保存の問題もあります。ファイルなどの資料は、それ自身が山田氏の仕事の具体的なようすを示しているものですから、もとの状態を大切にしながら整理・保存したい反面、写真を貼り付けたノートや青焼きの地図などは何らかの措置を講じないこと

にはくっついたり色あせたりしてしまいます。

また、上記のファイルからも明らかなように、これら文書資料には、氏の著作や録音テープなど他の資料と関連する資料が多く含まれています。例えば、〔写真4〕のA6判ノートには、「ハララキ」の踊りなどの様子についてイラストを交えながらの走り書きでメモした箇所があり、表紙に「1962年」とあることから見て、既にこの『センターだより』でも幾度か紹介した8ミリテープを撮影した際のワールドノートではないかと考えられます。音声・映像資料の調査とこの文書資料の調査を経て、この時の記録として、8ミリフィルム、音声テープ、そしてこのノートの3種類が出てきたことになります。文書資料の整理は、こうした連関にも目配りしながら、整理・保存の方法そのものを手探りしながらの作業になっています。



〔写真4〕

気持ちには急ぎながらも、調査の下調べから学説の主張に至るまで慎重な態度を崩さなかった山田氏の資料だからこそ余計に、拙速な整理がその学問の継承を妨げることになりはしないかと恐れもしつつ、作業を進めています。

(小川)

ヤイサマ クヌヒ

<yaysama ku=nu hi／ヤイサマを聞いた時>

大谷 洋一

1994年9月4日、日高管内に在住する大正生まれの女性からヤイサマ*を録音したのが、私の初めての調査であった。彼女は私の親戚であり、会ったこともあるはずなのだが、お互いに顔をまったく覚えていなかった。私がカムイユカラ（神謡）やウエベケレ（散文説話）に興味を持ってるのを知ると、彼女はアイヌ語話者を何人も自宅に招いて引き合わせてくれた。また、よく二人で訪ねて歩きもした。お年寄りが三、四人集まると、必ず飛び出すのがヤイサマである。

ヤイサマを誰から聞き覚えたのかと彼女に尋ねると、個人名か地域名だけで示す二通りの答えが返ってくる。地域名で答えた理由は、誰もが歌っていたものであるから、歌い手を特に一人にしぼりきれない場合や歌い手の名前を思い出せないため、せめて聞くことのできた場所として教えてくれた場合もある。出身地の門別町厚賀、結婚のために引っ越した平取町去場、イチャラパ（先祖供養の祭り）に出かけた先の鶴川町春日など、また、出身地の港には静内町をはじめとする日高各地のアイヌが働きに来ていたこともあり、飯場の夜はヤイサマが飛び交ったという。様々な土地で歌われたヤイサマの節を次々と聞かせてくれた。彼女は「真似してるんだからね」と言ってから歌うのが常である。「じゃあ、真似じゃなくて自分の節もあるんじゃないの？」ということでは聞かせてくれたヤイサマについては「情けないことあったら、山さ行って、泣きながら歌って歩くよ。青物（山菜）採りに行ってもね。夜でも寝られないことあったら、おっきな声で歌ったらね、この猫、怒られたと思って、ヤッと逃げて行くんだ」と笑い

ながら言う。

一人一人のヤイサマがどのような背景を持って生まれたのかは、伝承元が地域名だけの答えよりも、個人名、特にあだ名で示された方が見えてくる。それは、彼女とその人がより親密な関係にあったため、即興的なヤイサマを聞く機会に恵まれていたからだろう。そのようなヤイサマは、近所に住む人たちの現実の体験が反映されている。山へ行けば失恋した娘さんが涙ながらに歌っていたり、事故で両親を失い残された娘さんの嗚咽しながらのヤイサマも聞いていた。体の不自由な一人暮らしの老女が悲嘆に暮れる歌声が流れてくる家などという風景が彼女の心に焼きついている（いくらヤイサマを真似るのが上手でも人の死を嘆くヤイサマは真似ない）。

このような情景を羅列すると、ヤイサマとは、女性が悲しい時に歌うものだという印象を与えてしまったかもしれないが、男性も歌うし、楽しい宴会の席に招かれた喜びを即座にアイヌ語で歌われる場合も多い。それは踊りの輪を呼び起こす力がある。

ヤイサマを録音しようとすれば、当時の喜怒哀楽の感情を歌い手に蘇らせてしまい、それが聞き手にも激しく伝染する時がある。最初の録音調査で特に哀しく聞こえたヤイサマがあった。誰のヤイサマだったのかを尋ねると「あんたの先祖だ」と言われた。氏名と生没年月日ぐらいしか知ることのできなかったはずの身内の悲惨に触れた衝撃。歌い継いでいた彼女との出会いをさせてくれた何か特別な力に感謝している。

* ヤイサマは「即興歌」と訳されることが多い。しかし、ヤイサマの歌い手はその場その場での心象を表現することばかりでなく、過去に聞き覚えた歌詞と節を忠実に再現しようとすることもある。「即興的なヤイサマ」と「即興的でないヤイサマ」のあるのが実状である。

ふつうの人のふつうの文化

奥田 統己

1989年8月30日、静内町のシャクシャイン記念館において「エカシ・フチと語る会」という名の集まりが開かれた。当時の横路孝弘北海道知事が、胆振・日高・千歳から12人のエカシとフチをお招きし、それぞれの若いころからのお話をうかがった。11番目に静内の織田ステノさんが、自分の幼き日々を15分ほどアイヌ語で語った*。

織田さんは、父母を亡くして祖父母とともに暮らしているところから語り始める。お祖母さんの手伝いをしてウバユリやドングリを採り、畑に豆などを植えて食べていた。大風で家が潰れたとき、お祖母さんが屋根から臼をぶら下げておいたおかげで助かったこともある。叔父さんは、馬に晩の飼葉をつけて家に入ると、織田さんを側に座らせてユーカラを語って聞かせてくれた。アイヌ文化の研究者が彼女から聞いてきたのは、主にこうした経験なのだろう。

しかし話はそこで終わらなかった。馬が扱える年頃になってから、農家をやっていた叔父さんの手伝いをした思い出が始まる。2頭引きの耕作機を馬に引かせて、逆に引っ張られるようにしながら畑を耕すようになる…大正時代ころのようすのはずである。

1993年8月、私は千歳の白沢なべさんに子供のころの暮らしのようすをうかがった。物心ついたころ、すでにお父さんは千歳のさけます^{さけます}孵化場の事務所で働いていた。給料が出るとお酒を一本買ってきて、家でシヌラッパ（先祖供養）をした。ときどき「淋しいだろう」といってお父さんがユーカラなどを聞かせてくれることもあった。

やがて白沢さん自身も孵化場に勤め、なくてはならぬ働き手だとして、ほかの人が休んでいる期間も雇われるようになる。やはり大正ごろのようすだと

思われる。

「特定の川筋を中心にイオルと呼ぶ生活領域を形成し、狩猟・採集・漁撈に基礎をおく特有の生業形態を有することをはじめ、イオマンテに象徴される特徴ある儀礼、アイヌ文様に示される独自の芸術性、ユーカラをはじめとする口誦^{こうしゅう}伝承の数々、さらには、いわゆる古式舞踊を中心とする伝統的芸能など、数多くの特有の文化的特色の存在を指摘することができる。」という一文がある。率直に言って、この文と織田さんや白沢さんの思い出とのあいだには、かなりの開きがあるように思う。

民族の誇りと文化とが切り離せないことはいうまでもない。しかしそこでまず見るべきなのは、何百年も前の文化の「絢爛^{げんらん}たる」ようすなのだろうか。海外の文様や叙事詩との類似性なのだろうか。それらが民族の誇りを高める活力だといわれたなら、織田さんや白沢さんは自分の生涯に照らしてどう思うだろうか。生涯のなかでも、ウバユリ採りやユーカラなどだけが誇れる部分だったのだろうか。

誇りに思う自分たちの文化とはどういうものなのかという問いは、今なおアイヌ民族の一人一人が自らゆっくり考え答える機会を持つべきもののはずである。そのために必要なことは、織田さんや白沢さんのような祖父母たち、父母たちそして自分たちの生きてきた生活を見つめ直すことだと考える。上のカッコの内容は過去の研究の成果の一部だが、今や研究上の疑問も少なくない。ましてや、それをもって民族の誇りとすることはできない。

織田さんや白沢さんが誇りをもって語ったのは、馬に機械を引かせて田畑を耕しあるいは孵化場から給料を取りながら、養われ養ってきた日常だった。その全体が、ふつうのアイヌ女性のふつうのアイヌ文化だった。ユーカラもシヌラッパも、そうしたふつうの文化のなかの一部分として選び取ってきたも

のだったのだ。私は今そう受けとめている。

＊ このときの録音は当センターに保管されており、今年度の紀要で全体を紹介する予定である。

平成9年度前半の主な動き

〔4月〕

- ・第9回小泉文夫音楽賞授賞式（東京都／受賞：谷本）
- ・共同研究「幕別町蝦夷文化考古館文書資料調査」（幕別町／協力：小川）

〔6月〕

- ・平成9年度第1回センター運営協議会
- ・ウタリ担当職業相談員経験交流会議（札幌市／講師：大谷）
- ・東京海上火災企業研修（札幌市／講師：大谷）
- ・久保寺逸彦氏資料受贈
- ・共同研究「幕別町蝦夷文化考古館文書資料調査」（幕別町／協力：小川）

〔7月〕

- ・北海道ウタリ協会主催「アイヌ語指導者研修会」（千歳市／参加：大谷、澤井）
- ・共同研究「カムチャツカ半島民族芸能調査 コリヤクとアリュート」（ロシア連邦共和国／参加：甲地）
- ・久保寺逸彦氏資料贈呈式（知事室）

〔8月〕

- ・共同研究「第2次在ペテルスブルク博物館アイヌ資料の民族学的研究」（ロシア連邦共和国／参加：古原、大谷）

- ・北海学園大学開発研究所主催研究会「北海道開発に関する総合的研究」（札幌市／報告：小川）

〔9月〕

- ・共同研究「カムチャツカ半島民族芸能調査 コリヤクとアリュート」（ロシア連邦共和国／参加：谷本）
- ・第2回センター運営協議会

今年度のセンター刊行物の予定

- ・アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』3「イペ（食べる）」（仮題）

当センターでは「世界の先住民の国際10年」関連事業として、アイヌ文化紹介のための小冊子を刊行しています。第1冊「イタク（話す）」第2冊「イミ（着る）」に続く第3冊として、今年度は食をテーマに取り上げる予定です。

このほか、次の刊行物を予定しています。

- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第4号
- ・『アイヌ民族文化研究センターだより』第8号

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060 北海道札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850

開館/月～金 9:00～17:00 休館/土・日・祝